

私が二年生の時です。朝、米をといでいると、急に小指がしびれて、なんだか虫にかまれた様にいたくなったり、針でさす様にいたんだりしました。だが、私はそれを、お父さんには言わないで、かくして居ました。又、時にはこんな事もありました。おつゆがにへたのでおろそうと思って、なべを途中まで持って来ましたが、そこへこぼしてしまいました。おわんを割った事も時々ありました。

そして、一月程たちました。毎日、私は学校へ行きました。すると或日、皆が私の顔を見てはへんな顔をしているのです。私は家へ帰って鏡を見ました。私はびっくりしました。何時の間にか、まゆ毛がうすくなっていました。お父さんは、此の頃、私の顔を見ては、目に涙をためるのです。

三月目の事でした。私が学校からかえって、家で本を読んでいると、私達の受持の先生がおいでになって、お父さんと何か話をしておかへりになりました。もうその時私の親指と小指は、まがりかけていました、その日はそのまま暮れてしまひました。

あくる朝の事です。私が学校へ出ようとすると、お父さんが「志保子、ちょっと庭へおいで」とよびました。私が庭へおりに行くと、お父さんは「志保子、志保子はもう今日から学校へ行かれないのだ」と言って涙をこぼしました。私はあまりのお言葉にびっくりして、ご返事も出来ませんでした。すこしの間そこで泣いていましたが、もうあきらめて家の中へはいりました。

家の中で色々考へて見ましたが、頭がぼーとして、何が何だかわからない。そこへ静子が「ねえちゃん、手紙が来たよ」と言って、手紙を持って来ました。それは東京の全生病院から、姉さんのよこした手紙でした。封を切って見ると、手紙が二つにわかれていました。私には「志保子ちゃん、寒くなりましたね、みんなおかはりはありませんか、私は無事で暮らしていますから御安心下さい、志保ちゃんも病気になったさうですね、志保ちゃん、早くこちらへ来なさい、姉さんがかあいがつてあげますから・・・」と書いてありました。

そこまでは読めましたが、そこからはもう泣けて読めませんでした。静子が「ネエちゃん、どうしたの、何か書いてあったの」と言ひましたが何と返事してよいかわかりませんでした。静子は手紙を拾ってみました。静子は六つでした。